

日蓮大聖人御書全集

りつしょうかんしょう

立正觀抄

りつしょうかんしょう

# 立正觀抄

文永 11年(74) 53歳 最蓮房

ほつけしかんどういけつ

## 法華止觀同異決

にちれんせん  
日蓮撰す。

とうせい てんだい きょうほう しゅうがく  
当世、天台の教法を習学するの輩、多く觀心修行を

たつと ほつけほんじやくにもん す み  
貴んで法華本迹二門を捨てと見えたり。

いまと いまと かんじんしゅぎょう  
今問う。そもそも觀心修行と言うは、天台大師の摩訶止

かん なか ぎょう  
觀の「己心の中に行ずるところの法門を説く」の一心

かん かん よ  
三觀・一念三千の觀に依るか、はたまた世に流布せる達磨の

ぜんかん よ  
禪觀に依るか。

もし達磨の禅観にいらば、教禅ならば未顯眞実・妄語・  
方便の禅観なり。法華経の妙禅の時には「正直に方便を捨  
つ」と捨てらるる禅なり。祖師・達磨禅ならば教外別伝の  
天魔の禅なり。共にこれ無得道、妄語の禅なり。よつてこ  
れを用いるべからず。

もし天台の止觀の一心三觀にいらば、止觀一部の廢立、  
天台の本意に背くべからざるなり。もし止觀修行の觀心に  
いらば、法華経に背くべからず。止觀一部は法華経に依つ  
て建立す。一心三觀の修行は、妙法の不可得なるを感得

せんがためなり。故に知んぬ、法華経を捨ててただ観のみ  
を取つて正となすの輩は、大謗法・大邪見・天魔の所為な  
ることを。その故は、天台の一心三觀とは、法華経に依つ  
て三昧開発するを、己心証得の止觀と云うが故なり。

問う。天台大師の止觀一部、ならびに一念三千・一心  
三觀・己心証得の妙觀は、しかしながら法華経に依ると  
いう証拠、いかん。

答う。予、反詰して云わく、法華経にいらずと見えたる  
証文、いかん。



ゆえ

こころ

ほけきょう

よ

み

しょうもん

故に、この意は、法華経に依ると見えたる証文なり。

たしゅう

たい

とき

もんどう

たいこう

そん

ただし、他宗に対する時は、問答は大綱を存すべきな

り。

い

てんだい

しかん

ほけきょう

よ

すみ

す

ゆえ

てんだいだいし

ずといわば、速やかに捨つべきなり」と。その故は、天台大師、

か

やくそく

い

しゅたら

あ

ろく

もち

兼ねて約束して云わく「修多羅と合わば、録してこれを用い

もんな

ぎな

しんじゅ

しんじゅ

うんぬん

でんぎょうだいし

もん

りゅうじゅ

る。文無く義無ければ信受すべからず」云々。伝教大師云わ

ぶつせつ

えびよう

くでん

しん

ゆえ

しゅたら

よ

く「仏説に依憑せよ。口伝を信ずることなかれ」文。竜樹、

だいろん

い

しゅたら

よ

びやくろん

しゅたら

よ

大論に云わく「修多羅に依るは白論なり。修多羅に依らざ

こくろん

もん

きょうしうしゃくそんのたまわ

ほう

よ

にん

よ

るは黒論なり」文。教主釈尊云わく「法に依つて人に依

「らざれ」文。天台は、法華経に依り龍樹を高祖にしながら、  
経文に違し、我が言を翻して、外道・邪見の法に依つて止觀一部を釈すること、全く有るべからざるなり。  
問う。正しく止觀は法華経に依ると見えたる文、これ有りや。

答う。余りに多きが故に、少々これを出ださん。止觀に云わく「漸と不定とは、置いて論ぜず。今、経に依つてさらには円頓を明かさん」文。弘決に云わく「法華経の旨を攢めて、不思議の十乗十境、待絶滅絶の寂照の行を成す」

文。止觀大意に云わく「今家の教門は、竜樹をもつて始祖となす。慧文はただ内觀を列ぬるのみ。南岳・天台に泊んで、また法華三昧に因つて陀羅尼を發し、義門を開拓して、觀法周備す○もし法華を釈するには、いよいよすべからく権実・本迹を曉了すべし。方に行を立つべし。この經独り妙と称することを得。方にこれに依つて、もつて觀道を立つべし。五方便および十乘軌行と言はず、即ち円頓止觀、全く法華に依る。円頓止觀は即ち法華三昧の異名なるのみ」文。文句記に云わく「觀と經と合えば、他の宝を

かぞ  
数うるにあらず。方に知んぬ、止觀一部はこれ法華三昧の  
せんてい  
筌罈なり。もしこの意を得ば、方に經旨に会す」云々。唐土  
こころ  
の 人 師 • 行 滿 の 釈 せ る 学 天 台 宗 法 門 大 意 に 云 わく  
にんし  
ま か し か い 一 部  
きょうまん  
しゃく  
まさ  
きょうし  
え  
うんぬん  
とうど  
「摩 訶 止 觀 一 部 の 大 意 は、法 華 三昧 の 異 名 を 出 で ず。經 に  
ま か し か い 一 部  
た い い  
ほ つ け ざ ん ま い  
が く て ん だ い し ゆ う ほ う も ん た い い  
し ゆ  
も ん  
ま か し か い 一 部  
も ん  
も ん し ょ う ふ ん み ょ う  
き ょ う  
い  
た れ  
依 つ て 觀 を 修 す 文。これら の 文 証 分 明 な り。誰 か こ  
よ  
かん  
かん  
ろん  
を 論 ぜ ん。  
と  
てんだい  
ししゅ  
しゃく  
つ  
とき  
かんじん  
しゃく  
いた  
ほけきょう  
せんき  
ほ つ け ざ ん ま い  
しかんいちぶ  
まさ  
し  
こま  
しがん  
じきだつ  
き  
ほんじやく  
しゃく  
す  
み  
問 う。天 台、四 種 の 釈 を 作 る の 時、觀 心 の 釈 に 至 つ  
と  
ほんじやく  
しゃく  
す  
み  
本 迹 の 釈 を 捨 つ と 見 え た り。また 「法 華 經 は 漸 機 の た め  
に こ れ を 説 き、止 觀 は 直 達 の 機 の た め に こ れ を 説 く」と、

いかん。

答う。漸機のために劣を説き、頓機のために勝を説くな

らば、今の天台宗の意は、華厳・真言等の經は法華經に

勝れたりと云うべきや。今の天台宗の浅ましさは、真言は

事理俱密の教えなるが故に法華經に勝れたりと謂えり。故に、止觀は法華に勝ると云えるも、道理なり、道理なり。

次に、「觀心の釈の時、本迹を捨つ」という難は、法華經

のいづれの文にか人師の釈を本となして仏の教えを捨て

よと見えたるや。たとい天台の釈なりとも、釈尊の金言に

み

てんだい

しゃく

しやくそん

きんげん

そむ ほけきよう そむ

まつた

もち

背き法華經に背かば、全くこれを用いるべからざるなり。

「法に依つて人に依らざれ」の故に。竜樹・天台・伝教、

もと

元よりの御約束なるが故なり。その上、天台の釈の意は、

おんやくそく

ゆえ

うえ

こころ

さだ

「迹の大教起これば爾前の大教亡び、本の大教興れば

しゃく だいきようほろ

にぜん

ほん

せん

迹の大教亡び、觀心の大教興れば本の大教亡ぶ」と釈

しゃく

だいきようほろ

かんじん

だいきようほろ

ほん

だいきようほろ

せん

するは、本体の本法をば妙法不思議の一法に取り定めての

ほんたい しゅぎょう た

とき

いっぽう

と

さだ

せん

上に修行を立つるの時、今像法の修行は觀心の修行を詮

しゃく たず

とき

いまぞうほう

しゃくひる

しゅぎょう

かんじん

しゃくひる

ほん

たず

せん

となすに、「迹を尋ぬれば迹広く、本を尋ぬれば本高くして極むべからず。故に、末学は機に叶い難し。ただ己心の

きわ

ゆえ

まつがく

き

かな

がた

こしん

みょうほう

かん

しゃく

妙法のみを観ぜよ」という釈なり。しかりといえども、

「妙法を捨てよ」とは全く釈せざるなり。もし妙法を捨てば、何ものをか己心となして観ずべきや。如意宝珠を捨て

てば、瓦石を取つて宝となすべきか。悲しいかな、当世

天台宗の学者は、念佛・真言・禅宗等に同意するが故に、

天台の教釈を習い失つて、法華経に背き、大謗法の罪を得るなり。

もし止觀は法華経に勝ると云わば、種々の過これ有り。止觀は天台の道場所得の己証なり。法華経は釈尊の道場

しょとく だいほう

所得の大法なり 〈これ一〉。

釈尊は妙覺果滿の仏なり。

いち しゃくそん みようかく かまん ほとけ

てんだい じゅうぜん

天台は、住前にしていまだ証せざれば、名字・觀行・相似

す

には過ぐべからず。四十二重の劣なり 〈これ二〉。法華經は

しゃくそんないしそよぶつしゅつせ

しじゅうにじゅう れつ

に ほけきょう

釈尊乃至諸仏出世の本懷なり。止觀は天台出世の己証なり

さん

ほけきょう たほう

しあん

しょうみよう

しかん

てんだいしゅつせ

こしよう

らいじゅう ふんじん

〈これ三〉。法華經は多宝の証明あり。來集の分身は

こうちゅうぜつ

だいぼんてん つ

みな

しんじつ

だいびやくほう

とう

しゅじゆ

広長舌を大梵天に付く。「皆これ眞實なり」の大白法なり。

しかん

てんだい

せっぽう

し

とう

りやく

止觀は天台の説法なり 〈これ四〉。かくのごとき等の種々の

あ

相違これ有れども、なおこれを略するなり。

そういう

ひと

もんどう

い

しょひ

き

じょうき

ゆえ

すぐ

また一つの問答に云わく、所被の機、上機なるが故に勝る

と云わば、実を捨てて権を取り。天台云わく「教いよいよ  
権なれば位いよいよ高し」と釈し給うが故なり。所被の機、  
下劣なるが故に劣ると云わば、権を捨てて実を取り。天台、  
釈して云わく「教いよいよ実なれば位いよいよ下し」と  
云うが故なり。しかれども、止觀は上機のためにこれを説き、  
法華は下機のためにこれを説くと云わば、止觀は法華に劣  
れるが故に機を高く説くと聞こえたり。實にさもや有るら  
ん。

てんだいだいし　りようぜん　ちようしゆ　によらいしゅつせ　ほんかい　の  
天台大師は靈山の聽衆として如來出世の本懷を宣べた

ときいた

ゆえ

みようほう

みようじ

か

もうといえども、時至らざるが故に、妙法の名字を替えて

し  
か  
ん  
、  
な  
、  
)  
し  
や  
つ  
け  
、  
し  
ゆ  
、  
ゆ  
え  
、  
ほ  
ん  
げ  
、  
ふ  
ぞ  
く  
、  
ひ  
ろ  
、  
た  
ま

止觀と号す。迹化の衆なるが故に本化の付囁を弘め給む。

す。正直の妙法を止觀と説きまぎらかすが故に、ありの

少二  
みょうほう

たいざん  
ほう

人には  
二  
一  
〇  
文ゆえ  
二  
凡て

ままの妙法ならざれば、帶權の法に似たり。故に知んぬ、

天台弘通の所化の機は、在世帶權の円機のごとし。本化弘通

の所化の機は、法華本門の直機なり。

「止觀・法華は全く体同じ」と云わん、なお人師の釈を  
しかん ほつけ まつた たいおな い  
にんし しゃく

おもがくとがうせつ

もつて仏説に同ずる失、はなはだ重きなり。いかにいわん

や、「正觀は法華經に勝る」という邪義を申し出だすは、た

ほんげ ぐきょう しゃつけ ぐつう ぞうほう まっぽう しゃくもん  
だこれ本化の弘経と迹化の弘通と、像法と末法と、迹門の  
ふぞく ほんもん ふぞく まっぽう ぎょうじや い あらわ  
付囑と本門の付囑とを、末法の行者に云い顯させんがた  
ふってん おんはか  
めの仏天の御計らいなり。ここに知んぬ、当世天台宗の中  
ぎ い ひと そ し てんだい  
にこの義を云う人は、祖師・天台のためには不知恩の人な  
とが まぬか  
り。あにその過を免れんや。

そ てんだいだいし むかしりようぜん あ  
夫れ、天台大師は、昔靈山に在つては薬王と名づけ、今  
かんど あ てんだい な  
漢土に在つては天台と名づけ、日本国の中にては伝教と名  
さんぜ ぐつう やくおう な  
づく。三世の弘通はともに妙法と名づく。かくのごとく  
ほけきょう ぐつう たも ひと みょうほう な  
法華經を弘通し給う人は、在世の釈尊より外は、三国にそ  
ほか ざいせ しゃくそん ほか さんごく

の名を聞かず。有り難く御坐します大師を、その末学、その教釈を悪しく習つて、失無き天台に失を懸けたてまつる。あに大罪にあらずや。

今問う。天台の本意はいかなる法ぞや。

碩学等云わく、一心三觀これなりと。

今云わく、一實圓滿の一心三觀とは、誠に甚深なるに似たれども、なおもつて行者修行の方法なり。三觀とは因の義なるが故なり。慈覺大師、釈して云わく「三觀とは、法体

を得せしめんがための修観なり」云々。伝教大師云わく「今、

しかんしゅぎょう

ほつけ

みょうか

じょう

うんぬん  
ゆえ

止觀修行とは、法華の妙果を成せんがためなり」云々。故

に知んぬ、一心三觀とは、果地・果徳の法門を成せんがた

のうかん  
こうる

めの能觀の心なることを。いかにいわんや、三觀とは言説

い  
ほう  
ゆえ

によらい

かじ

かとく

みょうほう

たい

さんがん  
ごんぜつ

きょうもん

に出てたる法なるが故に、如來の果地・果徳の妙法に対す  
れば、可思議の三觀なり。

と  
いつしんさんがん  
すぐ

ほう

問う。一心三觀に勝れたる法とは、いかなる法ぞや。

こた

まこと

いちだいじ

ほうもん

ほとけ

ほとけ

答う。このこと誠に一大事の法門なり。「ただ仏と仏とのみ」の境界なるが故に、我らが言説に出だすべからず。

きょうがい

ゆえ

われ

ごんぜつ

い

故に、これを申すべからざるなり。ここをもつて經文には、

ゆえ

もう

きょうもん

「我が法は妙にして思い難し」「言をもつて宣ぶべからず」  
云々。妙覚果満の仏すら、なお不可説・不思議の法と説きたも  
給う。いかにいわんや、等覚の菩薩已下、乃至凡夫をや。  
問う。名字を聞かずんば、何をもつて勝れたる法有りと知  
ることを得んや。

答う。天台己証の法とはこれなり。当世の学者は、血脉  
相承を習い失うが故に、これを知らざるなり。相構えて相  
構えて、秘すべく秘すべき法門なり。しかりといえども、汝  
が志神妙なれば、その名を出だすなり。一言の法これ

なり。伝教大師の「一心三觀を一言に伝う」と書き給うこれなり。

問う。 いまだその法体を聞かず、いかん。

答う。 詮ずるところ、一言とは妙法これなり。

問う。 何をもつて、妙法は一心三觀に勝れたりといふことを知ることを得るや。

答う。 妙法は詮ずるところの功德なり、三觀は行者の

觀門なるが故なり。この妙法を仏説いて言わく「道場にて得しところの法」「我が法は妙にして思い難し」「この法

しりょう

ことば

の

うんぬん

てんだいい

は思量にあらず」「言をもつて宣ぶべからず」云々。天台云  
わく「妙は不可思議」「言語の道断え、心行の所滅す」「法  
は十界十如・因果不一の法なり」。三諦と云うも、三觀と云  
うも、三千と云うも、共に不思議の法とはいえども、天台の  
己証、天台の御思慮の及ぶところの法門なり。

この妙法は諸仏の師なり。今の経文のごとくんば、  
久遠実成の妙覚極果の仏の境界にして、爾前・迹門の  
教主、諸の仏菩薩の境界にあらず。経に「ただ仏と仏  
とのみ、いまし能く究尽したまえり」とは、迹門の界如三千

の法門をば、迹門の仏が当分究竟の辺を説けるなり。本地  
難思の境智の妙法は、迹仏等の思慮に及ばず。いかにいわ  
んや菩薩・凡夫をや。止觀の二字をば、「觀は仏知に名づけ、  
止は仏見に名づく」と釈すれども、迹門の仏知・仏見に  
して、妙覺極果の知見にはあらざるなり。その故は、止觀  
は天台己証の界如三千・三諦三觀を正となす。迹門の正意  
これなり。故に知んぬ、迹仏の知見なりといふことを。た  
だし、止觀に絶待不思議の妙觀を明かすといえども、ただ  
一念三千の妙觀に、しばらく与えて絶待不思議と名づくる

なり。

わざるや。

問う。天台大師、眞実にこの一言の妙法を証得したま

答う。内証はしからざるなり。外用においてはこれを  
弘通したまわざるなり。いわゆる内証の辺をば秘して、  
外用には三觀と号して一念三千の法門を示し現し給うな  
り。

問う。何が故ぞ、知りながら弘通し給わざるや。

答う。時至らざるが故に、付囑にあらざるが故に、迹化な  
り。

ゆえ  
るが故なり。

と  
てんだい  
いちごん  
みようほう  
しようとく  
たま  
しょうこ  
あ

い そ いちごん みようほう りょうげん ひら ごじん きかい  
に云わく「夫れ、一言の妙法とは、両眼を開いて五塵の境  
を見る時は應に隨縁真如なるべし。五眼を閉じて無念に住  
する時は當に不変真如なるべし。故に、この一言を聞くに、  
万法ここに達し、一代の修多羅一言に含まる」文。この  
両大師の血脉のごとくんば、天台大師の血脉相承の最要  
の法は、妙法の一言なり。一心三觀とは、詮ずるところ  
妙法を成就せんがための修行の方法なり。三觀は因の義、  
妙法は果の義なり。ただし、因のところに果有り、果のと  
ころに因有り、因果俱時の妙法を觀するが故に、かくのご

とき功能を得るなり。

くのう う

ここに知んぬ、「天台至極の法門は、法華本迹未分のと  
ころに無念の止觀を立てて、最秘の大法とす」といえる邪義、  
大きいなる僻見なりということを。四依弘經の大薩埵は、既  
に仏經に依つて諸論を造る。天台、何ぞ仏説に背いて無念  
の止觀を立てたまわんや。もし「この止觀、法華經にいら  
ず」といわば、天台の止觀、教外別伝の達磨の天魔の邪法に  
同ぜん。すべてしかるべきからず。哀れなり、哀れなり。

でんぎょう だいしゅ せい

伝教大師云わく「國主の制にあらざればもつて遵行す  
じゅんぎょう

ほうおう きょう

しんじゅ

ることなく、法王の教にあらざればもつて信受することな

けん」文。また云わく「四依、論を造るに、權有り実有り。

三乘、旨を述ぶるに、三有り一有り。ゆえに、天台智者は、

三乗の旨に順じて四教の階を定め、一実の教に依つて

一仏乗を建つ。六度に別有り、戒・度何ぞ同じからん。受法

同じからず、威儀あに同じからんや。この故に、天台の伝法

は深く四依に依り、また仏經に順ず」文。

本朝の天台宗の法門は伝教大師よりこれを始む。もし

「天台の止觀、法華經にいらず」といわば、日本において

でんぎょうこうそ　そむ　かんど　てんだい　そむ　りょうだいし  
は伝教高祖に背き、漢土においては天台に背く。両大師の  
伝法、既に法華經に依る。あにその末学これに違わんや。違  
うをもつて知んぬ、当世の天台家の人々、その名を天台山に  
借るといえども、学ぶところの法門は、達磨の僻見と  
善無畏の妄語とに依るといふことを。

てんだい　ほけきよう　よ　とうせい　ひとびと　な　てんだいさん  
まつな　ほうまん　だるま　びやっけん

ぜんむい　もうご　よ

てんだい　でんぎょう　げしゃく　みょうほう　いちごん　かぎ

天台・伝教の解釈のごとくんば、己心の中の秘法は、た  
だ妙法の一言に限るなり。しかれども、当世の天台宗の  
学者は、天台の石塔の血脉を秘し失うが故に、天台の  
けつみやくそうじよう　ひほう　なら　うしな　われ　いっしんさんがん　けつみやく

血脉相承の秘法を習い失つて、我と一心三觀の血脉と

がい まか しょ つく にしき ふくる い くび か はこ  
そこ うず こうじき う ぶっぽう はしつ てんだい ゆえ じやぎ こくちゅう る ふ てんだい  
の底に埋めて高直に売る。故に、邪義國中に流布して、天台  
の仏法を破失せるなり。天台の本意を失い、釈尊の妙法  
を下す。これひとえに、達磨の教訓、善無畏の勧めなり。  
故に、止觀をも知らず。一心三觀・一心三諦をも知らず。一念  
三千の觀をも知らず。本迹一門をも知らず。相待・絶待の  
二妙をも知らず。法華の妙觀をも知らず。教相をも知ら  
ず。權實をも知らず。四教八教をも知らず。五時五味の施化  
をも知らず。

きょう き じ こくそうおう ぎ もう およ じつきよう に  
教・機・時・國相應の義は申すに及ばず、実教にも似ず  
ごんきょう に どうり どうり  
權教にも似ざるなり。道理なり、道理なり。

なら てんだい でんぎょう しょでん ほけきょう ぜん しんごん おと  
「天台・伝教の所伝は、法華經は禪・真言より劣れり」  
ゆえ だるま じやぎ しんごん もうご う な ごんきょう  
と習うが故に、達磨の邪義、真言の妄語と打ち成つて、權教

に じつきよう に と おさ ゆえ  
にも似ず、実教にも似ず、二途に撮めざるなり。故に、

い とがな てんだい とが か ゆえ じやぎ もう  
だいほうぼうざいあらわ  
大謗法罪顯れて、「止觀は法華經に勝る」という邪義を申し  
出だして、失無き天台に失を懸けたてまつる。故に、高祖に  
そむ ふこう もの ほけきょう そむ たいほうぼうざい もの な  
背く不孝の者、法華經に背く大謗法罪の者と成るなり。

そ てんだい かんぽう たず だいそどうじょう  
夫れ、天台の觀法を尋ぬれば、大蘇道場において三昧

さんまい

かいほつ

このかた

め  
ひら  
みようほう  
おも

みようほう  
おも

ずいえんしんによ

開発せしより已來、「目を開いて妙法を思えば隨縁真如なり。

め  
と  
みようほう  
おも

ふへんしんによ

りょうしゅ

り。目を閉じて妙法を思えば不变真如なり。この両種の

しんによ

いちごん  
みようほう  
あ

われみようほう  
とな

とき  
ばんぽう

真如は、ただ一言の妙法に有り。我妙法を唱うる時、万法

たつ

いちだい

しゅたらいちごん

ふく

せん

ここに達し、一代の修多羅一言に含まる。詮ずるところ、

しゃくもん

たづ

しゃくひろ

ほんもん

たづ

もとたか

迹門を尋ぬれば迹広く、本門を尋ぬれば本高し。しかじ、

こしん

みようほう

かん

おぼ

己心の妙法を観ぜんには」とと思しめされしなり。

とうせい

がくしゃ

こころ  
え

ゆえ

てんだいこしょう

みようほう

当世の学者、この意を得ざるが故に、天台己証の妙法を

なら  
うしな

しかん

ほけきよう

すぐ

ぜんしゅう

しかん

すぐ

習い失つて、「止觀は法華經に勝れ、禪宗は止觀に勝れた

おも

ほけきよう

す

しかん

つ

しかん

す

り」と思つて、法華經を捨てて止觀に付き、止觀を捨てて

ぜんしゅう つ ぜんしゅう いちもん い まつ ふじか まつか  
禅宗に付くなり。禅宗の一門云わく「松に藤懸かる。松枯  
れ藤枯れて後、いかん」「上らざして一枝」なんだ云える天魔  
の語を深く信するが故なり。「修多羅の教主は松のごとく、  
その教法は藤のごとし。各々に諍論すといえども、仏も  
入滅して教法の威徳も無し。ここに知んぬ、修多羅の  
仏教は月を指す指なり。禅の一法のみ独り妙なり。これ  
を観すれば見性得達するなり」と云う大謗法の天魔の所為  
を信ずるが故なり。

ほけきょう ほとけ じゅみようむりよう じょうじゅうふめつ ほとけ  
しかれども、法華經の仏は、寿命無量・常住不滅の仏

なり。禪宗は滅度の仏と見るが故に、外道の無の見なり。

「この法は法位に住して、世間の相は常住なり」の金言に背く僻見なり。禪は、法華経の方便・無得道の禪なるを、真実常住の法と云うが故に、外道の常見なり。もし与えてこれを言わば、仏の方便・三藏教の分齊なり。もし奪つてこれを言わば、ただ外道の邪法なり。与は当分の義、奪は法華の義なり。法華の奪の義をもつての故に、禪は天魔・外道の法と云うなり。

問う。禪を天魔の法と云う証拠、いかん。

こえ  
答う。

さきせりや もつ  
前々に申すが」とし。